〔翻訳〕

ドローレス伯爵夫人
の
貧と富と罪と贖い

貧しい貴族の娘達の歓談に供する

教訓的実話

ルートヴィヒ・アーヒム・フォン・アルニム

著

山下　剛・林　雄作

訳

ラツィヴィル
侯爵
殿下への
献辞 ※1

誠実なる思いは変わることなく守護神に忠誠を誓う，
暗き時代よりそを引き上げたる守護神こそ，
輝く翼に乗りて歌いつつ彼方へ向かい，
高き平和のうちに虚しき諍いを越え行くゆえ。
はたして我にはこよなく楽しき生が訪れ，
そこで言葉は軽やかに歌となりぬ，
歌と我と，我ら変わることなく忠誠を誓う，
旋律（メロディー）により我らを聖別せる守護神に，
旋律（メロディー）こそただ独り心から泣き
北極光にも似て意味深く輝くゆえ。

目　　次

ドローレス伯爵夫人の貧と富と罪と贖い

第　一　部

貧

第　一　章　侯爵の城とP…伯爵の邸……132
第　二　章　P…伯爵とその一家……135
第　三　章　P…伯爵夫人の死と娘達の貧困。戦争が起こる……138
第　四　章　ユーグ・シャプラーとその従兄弟シモン……144
第　五　章　カール伯爵……154
第　六　章　学生達……157
第　七　章　カール伯爵，初めて二人の伯爵令嬢を訪問する……161
第　八　章　カール伯爵，ドローレス伯爵令嬢と婚約する……168
第　九　章　貧窮のカール伯爵。大学へ戻る……173

第　一　部
貧

第　一　章

侯爵の城とP…伯爵の邸（やしき）

南ドイツのとあるこぢんまりした城下町にさしかかると，山をくだり広い街道を馬車でやって来る旅人の目の前に，建て方も周囲の様子も全く異なる二つの大きな高い建物が現われる。古風な造りで，塔があり色は黒ずみ周りを堀に囲まれた城と，これに向かい合って，広い庭の大変美しい緑の中に，開放的で，軽やかで，明るいイタリア風の平屋根造りの邸が建っている。この邸は，明るい大理石の色ときらきら光る大きな窓が非常に際立ち，幸福な競争相手として，閉鎖的で不安げな古い時代と並ぶ新しく楽しい時代として輝いている。そのため，初めてこの光景を目にした者は，おそらく誰もが同様の思いに捉えられたことだろう。するとじきに，楽しい時代の住人達といっそう親しくなって，あり余るほどの美しい原生林の山や，とりどりの作物が植えられた豊かな谷間を一緒に眺めて楽しんでみたいという願望が起こる。だが，旅人が建物に十分近づいて両者の違いを逐一見極めると，陰欝に格子のはまった城に対する恐れは消えるが，同時にこの願望もすぐに消えてしまう。黒い城は保存が行き届き，堅牢で，突き出た尖塔と小さい尖った二重窓がついており，門の上には大きな石の紋章が掲げられている。とりわけ塔の四隅には小さな色とりどりの庭がもうけてある。そのこんもりとした手植えの花の陰から，侯爵の美しい令嬢達が通り過ぎる騎士達の姿を窺うのであろう。これら全ては人々がよくロマン的と呼ぶ風変わりな感じを与える。それによって我々は日常世界の陽光に照らされたような明瞭さから，ほの暗いいにしえの時代※2 に移って行く。事実この時代が我々を目覚めさせたのであり，我々は，とうに真昼になりすぐまた夜が来

るかも知れないのに，今なお密かにそれに初めと同じ愛情を持ち，それを忘れかねているのだから。ところで，この感じに浸って見ると，細い大理石の柱に支えられたこの芸術的な邸の方は，屋根までよじ登り輪舞を舞いながら硬直してしまったような裸形の神々の彫像がほどこされ，さながら魔法使いが神々と人間達を魅惑したまま解くのを止めてしまった空虚で異様な魔法のようだ。さらに子細に見ていくと，この邸の全ては破壊的な自然の手に引き渡されているようだ。長い間ここに住み着いていたであろう幸福は，力ずくでたくさんの逃げ道を作り，その隙間から消えてしまったのだ。下の階の窓はほとんどが壊されているか，あるいは間に合わせに内側の鎧戸が下ろされている。屋根はひびだらけになり，その飾り縁(ふち)の大部分は崩れていた。天窓の鎧戸は風にあおられ，だらしなく開いたり閉じたりしている。前庭を囲むきれいな鉄製の柵からは，悪戯者の手で金色の葉形飾りの大部分が盗まれている。その傍らに外された鉄の門扉が置かれ，一面に丈の高い草で覆われている。壁には子供の落書きで兵隊が描かれ，そこに兵隊の手で連隊の名が書き込まれている。旅人は腹立たしく目をそらし，邸を取り囲み後ろがみごとな高台になっている遊歩庭園を見やる。そこでは全てが青々とし，全てが歌い，全てが荒れ放題になっている。山頂にある崩れかけた家もわざと廃虚にしてあるのか，偶然そうなっただけなのか，見ただけでは判然としなかった。アメリカ風の薮のそばにわずかばかりアメリカのじゃがいもが植えてあるのは，おそらく子供じみた畑仕事の真似事だろう。荒れた広い並木道では野兎達が素早く跳び回っては姿を隠し，小鳥達が葉の生い茂った木の梢という梢に巣作りをするように，妨げられることなくささやかな穴掘り仕事をしている。近所のあちらこちらの小屋からやって来たらしい貧しい半裸の子供達は，柘(つげ)の木の飾り文字の間にある一本一本の杭に自分達の山羊を結び付けてしまうと，水の涸れた噴水の床で追いかけっこをしている。この柘の木は邸の裏の大きな広場にあり，運命の手で半ば消されてしまった重要な文字のように，判読しようとする旅人の頭を長いこと悩ませるが，何

の手掛かりも得られない。結局，子供の一人が二三言で全てを説明し，これはヘクトルとゾフィーと書いてあると言い，この邸を建てたP…伯爵と伯爵夫人の名前だとわかる。この子供達と彼らになついているこの山羊達と数匹の小羊達が，草も雑草も，花も茨も，庭からきれいさっぱり無くしているのだ。

夏の間だけ使われる王侯の城は，それだけでもう我々に恐怖心を抱かせる。磨かれた窓は一年のうちかなり長期間にわたって閉め切られ，住む人もなくひっそりしているが，周りの緑は全て目覚めてざわめき，泉という泉はさらさら流れ，通路はことごとく開かれているため，城はまるで目を開けたまま横になって眠っているように見えるからだ。人が暮らすために使うこの途方もなく大きな施設に人気（ひとけ）がないというだけで，我々の心は，知らぬ間に周りで民族の移動が起こり，自分だけが見知らぬ人々の間に取り残されてしまったという物悲しい気持ちでいっぱいになるのだ。　―　だが，この民族移動が本当に終わって，上に立っていた者が没落し，下司（げす）どもが同じ高みに近づこうとせず，野卑に嘲りながらそれに襲いかかるのを見る苦痛に比べれば，この物悲しさなど何ほどのことがあろうか。卑しい剝き出しの貧困が，異質の華麗さや高い教養の残骸を勝者面（づら）をして揶揄し，富にまかせて作ってきた物を持ち主がもはや守ることも維持することもできないからといって，わけもわからず芸術的な記念物を破壊するとしたら　―　だから，私は悲痛な思いで下賤で野蛮な子供達に背を向け，その輪から離れた。彼らは，そこの伯爵邸の遊歩庭園で薔薇の葉陰に眠りながら安らう大理石の美しい愛神アモルの像を，恥知らずにも繰り返し鞭打っていた。野育ちの彼らにはそれが手ひどい仕置きのつもりだったのだ。一体この大きな家には私が止めたこの忌まわしい行為をさらに叱りつける者が誰一人いないのかと，戸という戸を叩いて回ったが無駄だった。私の足音は，寂しく，ますます早く，ますます苛立って，交代を忘れた歩哨のように入口の柱の間（あいだ）で響いた。それでコリント様式の柱の葉模様にある巣の中から燕が飛んで行ったのは，嵐でも来たかと様子を見るためだったのかも知れない。

私はひどく蒸し暑く思えたので，上の部屋に若い伯爵令嬢が二人隠れ住んでいるとはつゆ考えなかった。そこなら，どんなに天気が荒れても実にたやすくやり過ごせただろう。私は再び馬車に乗った。私は，いっそのこと稲妻が一瞬にしてあらゆる芸術作品を無に帰せしめるなり，一人の敵がそれをもぎ取るなりする方が良いと思った。それを理解もせず，神聖なしきたりに則って保存もしないような様々な民族の目に長い年月さらされて，台無しになったり汚されたりするよりはましだと思ったのだ。というのも，美を破壊する者あるいは美の破壊を許す者は，決してそれを崇めることも産み出すこともできないが，我が身と自由な世界から美を知ったわけではないという者でさえ，美を崇め産み出すことはできるからである。

第　二　章

P…伯爵とその一家

この邸と，芸術品で飾られたこの庭園は，今となっては誰も価値があるとは思わなかっただろうし，実際誰の役にも立たなくなっていたが，これらは情熱的な建築通だったP…伯爵が長年の苦労の末に造り上げた作品であった。これによって伯爵の眼識の確かさと趣味の良さは大いに評判を高めた。これらはその地方一帯では世界の奇跡と言われていたし，イタリアに建てられても目を見張るものとなったことだろう。伯爵は大いに芸術的才能を発揮し，パラディオン※3 の最も優れた設計を自家薬籠中のものとしていたのだ。庭園はフランス風から野趣を生かしたものへと移って行った。※4 すると，この建物の美しさではなく，その大きさが侯爵夫人の自尊心を傷つけることになった。彼女の伯爵への好意が伯爵夫人に対する一種の嫉妬に変わっていったのだ。というのも，彼女は伯爵夫人が伯爵を手に入れただけで，もうとても我慢ならなかったから

である。侯爵夫人は，向かい側の明るい部屋の数々を目にしてからというもの，それまではなかったことだが，住み慣れた城がまるで牢獄のように感じられた。普段はすっかり彼女の言いなりだった侯爵も，同じような城館を建てるとなるとどうしても彼女の言うことを聞かなかった。伯爵は自分の作品にもう鼻高々で，侯爵夫人が腹立ち紛れにそれを咎めようとした時にも，その慢心はおさまるところを知らなかった。伯爵は侯爵の三十年来の親友で，青年時代からともに過ごし，旅に出ては彼と幾多の冒険をやってのけ，侯爵夫人との仲を取り持ってやったのも伯爵だった。それが今では傍若無人となり，侯爵家への出入りも禁じられることになった。伯爵は一言の反論もしなかった。だが，ある詩句を彫り込ませて庭の門扉の上に掲げた。

友よ，侯爵達には用心せよ，
奴らは決して友にならぬゆえ，
たとえ奴らのために飢え，
また渇こうとも。

しかし，ここでもっと落ち着いて伯爵と侯爵の関係を眺めてみれば，彼を侯爵に結び付けていたのは必ずしも純粋な友情ではなかったということがわかる。彼にとって友情とは，どうにも動かせなかった二人の生まれの違いを均す一つの手段にすぎなかったのだ。彼は独立心旺盛で，この不和のため町と地方の住民の大方はすぐに彼から遠ざかったが，そんなことはたやすく無視してしまった。さて，彼の新居への入居祝いは華々しさに欠け，快からぬ徴(しるし)さえ伴っていた。つまり，侯爵の世継の王子が伯爵の下の娘ドローレス※5 に子供らしい恋心を抱いており，人目を忍んで通って来ていたが，ある時ドローレスが王子と一緒に滑りやすい階段を跳び下りたところ，王子は足を踏み外し，血を流して半死半生で両親の侯爵家へと運び込まれたのだった。それからというもの，両

親は子供達に対し伯爵家への出入りをさらに厳しく禁じた。伯爵はこの禁令にたいそう気を悪くした。まさに侯爵のこの長男こそ，侯爵家の血統に反し，伯爵と同じ黒髪であったからなおさらだった。伯爵はこの子を他の誰よりもひいきにしていたのだ。伯爵の上の娘クレーリアはこの別離をひどく悲しみ，様々に途方もないことを考え出しては，何とか今までのつながりを保とうとした。しかし，彼女が時間と別の人々との交際によって徐々にそれを埋め合わせていったのに対し，ドローレスは数日後にはもうそれを忘れてしまっていた。

大がかりな建築と，さらには自分の邸を社交の催しで活気づけようとしたせいで，数年後クレーリアが十八歳，ドローレスが十六歳になった時，伯爵の財産はすっかり底をついてしまった。伯爵家の人々もよその者達も，様々な気晴らしが次々と繰り広げられるため，少しもそのことに気づかなかった。ある晩のこと，王女達が母の侯爵夫人とともに金色の渦巻き模様の馬車に乗って悠然と通りかかったが，伯爵令嬢ドローレスが赤い乗馬服に身を包み優雅な英国産の馬に乗り，様々な制服を着た身分卑しからぬ客人達に囲まれて，森の中で開かれている祝宴へと急ぐところを見て，内心嫉ましく思った。祝宴が催されているらしいことは，にぎやかな狩の音楽から察しがついていたのだ。するとドローレスは，多分ふざけ半分で同行の男達に注意を促し，大きな髭をたくわえた馭者と，年老いて艶のある肥った六頭の黒馬につけられた，いかにも古めかしい磨き上げられた馬具を見るように言った。この類のことが何度も人々の口に上り憤慨の種になった。それにしても，町で巨額の金が浪費されることを手放しで喜ぶ領主がどうして人々に必要だったろう。クレーリアは貧乏人に対して慈悲の気持ちを抱いていた。ドローレスは貧困というものをまるで知らなかった。貧困は彼女にとって物語に出て来るような人物であり，彼女も時にはその仮面をつけることがあった。彼女は深刻ぶって若い男達に，自分はもっと質素な生活に憧れているのだと語り，若い男達もそういう彼女に感心するのだった。伯爵は自分の資産状態を正確に見通して

いたにも拘わらず，相も変わらず呑気に，また極めて健康に愉快な日々を送っていた。そのため，老衰など彼にはまだ無縁のように思われた。見込み違いも甚だしいことに，彼は当てにできない遺産を当て込んだり，死ぬはおろか結婚して息子達まで残している数人の親戚が何とか死なないものかと考えたり，遂には宝くじまで頼りにする始末だった。いつもの費用を来月分はどうにも払えないことがやっとわかった時，夜遅く床についた彼の夢に妻と娘達の年齢が幸福をもたらす数字として現れた。彼はこの夢を道徳的に解釈するどころか，直接この夢の正しさを証明しようと思い，宝くじとなると手当り次第にその三つの数字に大金を注ぎ込んだ。彼は自分の考えに非常に自信があり，それを今の快適な生活が続けられるように定められた天啓だと思って，数人の借金取りに抽選の結果が全部届いた日に来るよう命じた。その日はすぐにやって来た。彼は自信満々で手紙を開けた。彼の数字はどれ一つ出て来なかった。軽率至極にも，彼は我と我が身を嘲笑い，自分の意図を家族に打ち明けることなく別れを告げた。まるで，最後の客がたった今旅立ってしまったので，新しい客を連れて来ようと小旅行に出かけるかのようであった。そして彼は休みなく，有り金をはたいてドイツのとある港まで旅をした。順風が吹き，彼が乗り込んだ東インド行きの船に船出を促したその瞬間になってやっと，彼は自分の置かれた状況と広い世界へ出て行くという決意について，家族に短い手紙を書いてやる始末だった。

第　三　章

P…伯爵夫人の死と娘達の貧困。戦争が起こる

この手紙が届かぬうちに，伯爵の邸では罪のない女達の身に不安で心が引き裂かれるような事件が，矢継ぎ早に降りかかってきていた。とうからこっそり

伯爵の資産状態を探っていた数人の商人が，借金を早く支払ってくれとしつこく催促してきた。初め伯爵夫人は微笑んでそれに取り合わなかったが，翌日商人達はすぐまたやって来て，伯爵のお帰りの予定をはっきり伺いたいと言った。すると伯爵夫人は，夫の留守が長引いていることにとりわけ不審を感じていたので，妙に胸騒ぎがした。彼女はいくつか心当りの所に急ぎの使いを遣った。年若い令嬢達は伯爵の身に何か間違いがあったのではないかと心配し，クレーリアは祈り，ドローレスはほとんど一日中床に臥せったままだった。昔は二人を抱いてやったこともあり，たいそう忠実に家事の切り盛りをしている老執事が令嬢達の手を取って，気を確かに持ってくださいと子細ありげに言った。いろいろお心当りもございましょうが，それだけではないのです。しばらく前から，例えば旦那様のお髭をあたる時に気づいておりましたが，外見はご健康そうでしたが，お体は引き締まっておられませんでした。それに，夢でもご覧になっているような様子で座っておいででした。きっと病気になられたのでしょう，と言った。やっと伯爵の手紙が届いて，不安な疑念はことごとく晴らしたものの，彼らの目の前に口を開けた深淵を稲妻のように照らし出した。伯爵夫人は，それまで楽しい暮らしで二人の美しい娘達と競ってみずみずしい若さを保っていた。伯爵は単に習慣からではなく，新婚時代と変わらず彼女を愛していた。他に心配事があろうとなかろうと，伯爵が不在というだけで，彼の身を案じるだけで，それは彼女を惨めにしたことだろう。彼女は見る間に老け込み，彼女にとって幸せなことに，ほどなく死んだ。いつもは何事にも引けを取るまいとしていた侯爵夫人に支払いの猶予を求めて叶えられなかったという屈辱が，彼女にとっては致命的な打撃となったのだ。愛らしい二人の娘達は貧困のため喪服すら着ることができず，広い邸にひっそりと引きこもっていた。一つの苦しみがもう一つの苦しみを抑えてしまった。二人は，お側御用の侍女達に暇を出し普段の来客まで断らざるを得なくなった時にはあれほど泣いたのに，豪華な家具や寝台や銀器が競売にかけられ一番高い値をつけた人に落札されるのを

見ても，何とも感じなかったのである。老執事は商人達の無情で恥知らずの行為に憤慨した。彼らは伯爵のおかげで商売を始め，厚顔にも彼をだまして懐を肥やしていたくせに，今度はわずかばかりの借金のかたに伯爵の財産を最後の一つまでむしり取ってしまったのだ。彼は，あんな奴らは決していい目に会うわけはないと断言したが，今ではにっちもさっちも行かなくなっていた令嬢達にとって，それが何の役に立ったろう。男系相続の封土は公的な管理に移された。非情な債権者達にいくら愛想を使おうが，所有権は彼らの手に渡っていたので，折よく戦争が起こって小さな町が散々に荒らされなかったら，貧しく美しい娘達は家からも追い出されたことだろう。戦争は侯爵家を先祖代々の城から永久に追い出し，一帯の土地の値を急激に下げ，そんなに大きな家を持っていたのでは出費が収入に見合わないことになった。それで，債権者達は賢明にも家の所有をためらっていたのである。令嬢達は当然ながら邸に大変愛着を持ち，その中は隅から隅まで知っていた。自分の家の一部屋を使ってくれという老執事のすすめに従う代わりに，二人は侍女達が使っていた小部屋に引きこもり，他国の兵隊達が宿営のためにやって来ると，周りのドアというドアに三重にも四重にも鍵をかけた。何度か疲れた兵隊達が力ずくで家に押し入って来たが，全然人の姿がないので，町から食べ物を取り寄せ，幾晩も飲み明かしては家の中で大騒ぎをした。あわれな娘達は不安でたまらず，荒くれどもが近づいて来るのにこわごわ聞き耳を立てていた。あるときは，略奪目当ての一団がドアというドアを通り抜けて二人のところまでやって来たことさえあった。兵隊というものは，鍵のかかったドアと見れば，その中には大変な金目の物が隠してあると思うものだ。連中がとうとう幾つものドアを突き破って部屋に入ると，聖母の前にひざまずいている娘達の姿が目に入った。二人は一日中何も食べていなかった。恐ろしさのあまり真青になった二人の姿は人の心を打つ石像のようだった。この光景には粗野な連中さえも心を揺さぶられた。兵隊達は，どうして自分達のところへ来なかったのかと尋ねた。来れば何かあげようと思った

のにと言って，一人一人が手軽に得た金を二三枚ずつ二人に投げてよこし，その代わりに二三度手に接吻を受けた。またある者は，伯爵令嬢ドローレスに向かって，あなたは自分がこれまで目にしたうちで一番美しい娘だから，結婚して連れて帰りたいと言った。彼女もその男が大変気に入ったが，彼がそう言って彼女に迫っているうちに，即時出発の乗馬命令が下り，止むなく去って行った。彼女が再びこの男に会うことはなかった。　―　戦争が遠ざかると，当てのない希望を抱いたり，無理に気を紛らしたりすることが次第にできなくなった分だけ，ますますいたるところで欠乏が感じられるようになった。無情な借金取り達も多くは令嬢達と全く同様に貧しかった。二人は今では人目を憚ることなく庭を耕して食物を得ようとしていた。残念ながら果樹はわずかだけで，そこにはたいてい野生の森の木やアメリカの灌木が植えられていた。これらの樹木は，陰を作って暑さをしのぐためのものだったが，薪にされることになった。二人はあちこちの通路でじゃがいもを栽培した。クレーリアが刺繍で稼いだ金で買った数匹の山羊から乳を採り，罠にかけて捕まえた数匹の野兎がわずかばかりの肉料理となった。老執事は厄介をかけないようにと彼女達の許を去らざるを得なかったが，様々な食料を運んで来てくれた。彼女達は彼から物を貰うのを恥ずかしいとは思わなかった。彼は，彼女達が体に悪いといって食べさせてもらえなかった食べ物を，小さいときから何かと内緒でくれたものだった。その上クレーリアの小綺麗な刺繍をごく人目につかぬように売りさばいてさえくれた。ドローレスの方はたいていひどい朝寝坊で，これらの仕事には役に立たなかった。それに彼女はスケッチと音楽が大好きだったので，どうしても必要な家事を除けばこれ以外のことはめったにしなかったのだ。だが，彼女のスケッチブックというのは邸の最上階の大きな白い壁のことで，彼女はここに木炭や煤で知っているありとあらゆる話を大変みごとに描いた。二人の教訓や娯楽になるものは，古くさいといって借金取りが引き取らなかった書物の他には何も残っていなかった。それでも二人は寂しさから四折版の本を次々と

読んでいった。たいていは古い歴史の本で，そこに書かれた昔の貴族の気概を知るにつれ，彼女達はこの頃広く行われつつあったあらゆる身分の均一化※6に反感を覚えるようになった。こうして彼女達は新たな恥知らずな交際の流儀から逃れた。それは戦争に伴う不道徳と結び付き，小さな町の貧しい娘達を朗らかにもし，堕落させもしていたのだ。この地方の貴族は，一部の者達は逃げ出して，避けられぬ運命から逃れられると相も変らず思い込んでいた。また一部の者達は非常に零落し，我が身のことだけで精一杯だったので，二人の若い娘達がいることに注意を払わなかった。二人は幸せな日々には彼らのことよりあらゆる外来の客を優先していたのだ。というのも，儀礼だけが支配するところでは，全くの外来の客に自己紹介の機会を与えること自体しばしば優遇と見えるからであった。ドローレスが朝遅く起きて姉の刺繍枠のところに歩み寄るときには，いつも不思議な夢が頭に残っており，それは彼女達に大きな幸福を約束し，面白がらせるものだった。あるときは，騎士の侯爵が怪我をしてこの家に運び込まれ，念入りに傷に包帯をしてあげたお礼に彼女と結婚したというものだった。またあるときは，庭の木の根元に宝が埋まっている夢を見て　―彼女は勇んでそこへ行って一生懸命に掘り返し，無理にせがんでとうとう姉も手伝わせた。　そして今度は二人で掘ったが，　結局水が湧いて砂をぬらしただけで，彼女の希望も水の泡となった。こんなふうに，二人の娘達はそれぞれのやり方でその日その日を暮らしていた。クレーリアは祈り，働いた。ドローレスは夢を見，楽しんだ。一日また一日と過ぎ，とうとう新しい年が始まる日になった。ずっとこの繰り返しで，あの大きな不幸が起こってからというもの，彼女達は庭の藪から巣を取り出して小鳥を育ててはこっそり売っていたが，それももう三度目になっていた。しかし，この荒れた家に宿を求める王侯など一人もいなかった。乞食でさえ，石の割れ目のいたるところから草がぼうぼうと生え出た家の前で，物乞いの歌を歌おうとはしなかった。あるときドローレスは，日曜日で着飾った町の者達が家の前を通って行くのを見て妙に興奮し，姉

に向かって言った。

「ほら，あそこを歩いて行く娘を見てごらんなさい。きちんとした服を着せてやれば，私達と同じ身分みたいに見えると思うわ。」

「私達と同じ身分みたいにきちんとねえ。」と言って姉は溜息をついた。「あの娘が贅沢に着込んでいるスカートだけでも，私達二人分のきちんとした服装になると思うわ。あの真白な帽子だけで服が二三着買えるはずよ。」

「変だわ。」とドローレスは言った。「だって，町の者達って，自分が楽しむためにお金をどう使えばいいのかよく知らないんだもの。それであんなに奇妙に飾り立てることになるんだわ。ねえ，町の者に私達の親戚がいればよかったわね。そのほうが家来筋の親戚よりも多くのことをしてくれそうですもの。」

「ねえ，ドローレス。」とこれに対してクレーリアが言った。「この前ユーグ・シャプラーのことを書いた古い本※7 で，あるお話を見つけたの。あの本は古い言葉で書いてあるから，あなたはいつも読みたがらなかったわね。私はすっかり読み慣れたから，古い本に書いてあることは大概わかるようになったの。今からあなたにそれを話してあげるわ。貴族がこれまでどんなふうに困難に立ち向かってきたかといえば，それはやはりいつもそれぞれ独自のやり方だったの。だから今度は私達もそれを証明してみせましょうよ。」

「それはいいけど，ねえ，赤いチョッキを着たあのきれいな農民の若者を見てごらんなさいよ。」と言ってドローレスは姉の言葉を遮った。「侯爵の世継の王子に似ていないかしら。いいこと，クレーリア。はっきり言っておくけど，このままずっと農民みたいな卑しい仕事をして一生を終わるんだったら，誰とも結婚しないよりは，あんな農民とでもいいから結婚した方がましだと本当に思っているのよ。」

「恥ずかしいと思わないの。」とクレーリアは言った。「冗談にもそんなことを言うものじゃないわ。あなたが偶然知り合った貧しい若者に恋をしたというのなら，決して反対はしないでしょうよ。そんな情熱のために身分違いの結

婚をして，私達一族の昔からのしきたりと名誉を犠牲にするというのなら，あなたを不憫には思っても，責めたりはしないと思うわ。でも，男の人や結婚のことをそんなふうにどれもこれも同じに話すのは，身分のある娘にはふさわしくないわ。」

「あら。」と言ってドローレスは楽しそうに歌った。

「美しい若者達と話したくても，
彼らはすぐに恭しくお辞儀をするばかり，
どれほど接吻したくて
この赤い唇を差し出しているか，誰も気づいてくれない。
ああ，自分をこうも重荷に思うことがしばしばだった，
ああ，伯爵の家にさえ生まれていなければよかったのに。

この先お姉様がこの知恵を本で読むことなんてあるのかしら。もっと勉強してほしいわ。さあ，その古い話というのを聞かせてちょうだい。その話の方が面白いといいけど。」

ここで，彼女の話を手短かになぞっておこう。というのは，これは我々にも面白い話だし，これら二人の里子の娘達とも密接な関係があるからである。

第　四　章

ユーグ・シャプラーとその従兄弟シモン

ジェルニエ・シャプラー（カペー）公は，血筋からしていかにも高貴で騎士らしい男であったが，何恥じることなくパリの裕福な肉屋の娘を妻に娶った。それは信心深く貞淑で，とても美しい乙女だった。神はこの男に金と財産をたっ

ぷり与えた上に，この奥方とともに一人の息子をも授けた。それは，人並み外れた強さと気高い気性を持つ子供が生まれるようにと，二人でみごとに力を合わせた結果だった。父親はこの息子が生まれる前に死に，母親はお産で死んだ。親類縁者が名親となり，この子をユーグ（フーゴー）と名付けた。この子はあらゆる騎士の徳に囲まれて育った。国中に彼が名誉を賭けない武芸試合などなかった。だが彼は両親の躾を受けないままに育ったので，食事の作法も何もあったものではなかった。またかなりの大食漢で，平らげる量も相当なものだった。ユーグの財産がすっかり底をついたとき，酒場の主人も靴屋も仕立屋も鎧師も拍車作りの職人達も，それを夢にも思っていなかった。彼らは，今でも似たようなものだが，たくさん買うくらいだから同じくらい貯め込んでいるに違いないと思い込んでいたのだ。

ドローレス：「お父様だって，　— ひどいわ，全然私達の面倒を見てくださらなかったんですもの。なぜ私達なんか作ったのかしら。」

．．．さて，この借金取り達がやって来るとユーグは大変不機嫌になり，数日間というもの家に閉じこもると，豪華な焙り肉の代わりに粗末なアルメ・リッター※8 を食べて過ごした。それから彼はとうとう，パリの裕福な肉屋で，母方の最も近い血筋に当たる従兄弟のシモンのところへ行こうと思い立った。それでユーグはある朝こっそり旅立ち，馬でパリへ向かった。従兄弟の店先まで来ると，赤い厚切りのふっくらした焼肉が高価な壁布のようにぶら下がっていた。そしてまもなく彼だということがわかり，扉が開けられた。しかしユーグはすぐ家には入らず，馬から下りて帽子を取ると，まことにへりくだって従兄弟に挨拶をした。すると，従兄弟も同じへりくだった態度で歓迎の言葉を述べた。「これはこれはユーグ様，この私めにそんなにへりくだった振る舞いをなさるとは，どういうおつもりでございます。貴方のそんなひどい旅のお姿はこれまで一度も拝見したことがございませんでしたのに。お父上のジェルニエ様も決して貴方をこんな卑しい身分になさったわけではございませんよ。ご存知でも

ございましょうが，お父上は武具をつけた十二頭の馬を引き連れて，よく拙宅をお宿にされたものです。それにフランス中からよりすぐった下僕も引き連れていらっしゃいました。それで，貴方のご様子に驚いて，何かうまく行かないことがあるのではとご心配申し上げるのです。どうかお入りください。馬もしっかりお世話させますから。それに，それほど気にかかる心配事がおありなら，どうか遠慮なくおっしゃってください。もしこの身と金子（きんす）でお力添えできることなら，気兼ねなさることはございません。もの惜しみなどいたしませんし，気を悪くもいたしませんので。」

ドローレス：「本当に，私達の従兄弟達もそんなふうに考えてくれていたらね。だって身分の卑しい男でもそうだったのよ。ああ，お姉様，私達にも町の肉屋に親戚がいればよかったのに。」

．．．この親切な申し出に甘えて，ユーグは従兄弟のシモンと一緒に家に入った。馬は勒を外され，彼は鎧と兜と武具を外した。その間に従兄弟のシモンはすばらしい夕食を用意させた。出来立てソーセージ入りのスープ，牛の骨髄をのせたトースト，干しぶどうをあしらったリブ，アーモンドを詰めた胸肉。そこに彼の細君が歩み出て来た。ちょうどたくさん火を使っていた台所から出て来たところだったので，すっかり顔が火照っていた。そして彼女もユーグ様の姿を見て，驚きを口にした。彼の父がそんなひどい身なりをしたのをついぞ見たことがなかったからだ。しかしユーグはそれについては口をつぐみ，陽気に振る舞っていた。そして夕食も終わり，食卓が片づけられた。するとユーグは従兄弟に，後見役なしで自分の財産を管理するようになった二年間にどのように家政を執り，土地財産を全て食い潰してしまったか，そればかりか，どうして二千クローネの借金を背負い込むはめになったか，一部始終をおもむろに語り始めた。そして，借金取りのために昼も夜も落ち着いていられないので，従兄弟に良い知恵を貸してもらいたいと思い，国を出て来たのだと語った。

ドローレス：「それにしてもお父様は今頃どこにいらっしゃるのかしら。」

．．．さて，従兄弟のシモンはこれら全てを聞くと大変驚き，同情にかられて，心のこもった優しい言葉でユーグを慰め始めた。「ユーグ様，貴方のこのご不幸はまことにお気の毒に存じます。ですが，商売でも始めていれば，そのように財産を無益に蕩尽することもなかったことでしょう。と申しますのも，手に入れた財産を一度無くすと，取り戻すのは並大抵の苦労ではないからです。それに，そんなに鷹揚にお金を使ったり，のらくらと美しいご婦人方や悪い友達の言いなりになるべきではなかったでしょうに。今となれば，貴方がお困りになっても，誰も助けてくれる者がいないことにお気づきでしょうからね。仮に誰かが貴方のお命を，滅相もございませんが，一文銭一枚でお助けできるとしてもです。」

ドローレス：「私達の家で楽しんだお金持ちの英国人か外国の王子様で，私達に一文銭をくれる方がいらっしゃるかしら。」

．．．「なるほど貴方のお父上も立派なご身分の方でいらっしゃいましたが，一方では財産やお金もたくさん蓄えていらしたのです。今度はそれを貴方がこんなふうに浪費なさったというわけです。」

シモンのこの説教を聞いてユーグは不機嫌になり，こう話し始めた。「なあシモンよ，説教はもうたくさんだ。何しろ慣れていないんでね。腹にこたえるよ。復活祭に一つ聞くと，それを消化するのにまる一年かかってしまうのさ。それに叱言ばかり並べても仕様がないさ。何しろもう起きてしまったことだし，説教を聞きにここまで来たわけでもないのだから。それに馬がもう出てしまった後で，馬小屋を閉めたところで何の意味もないからね。だが，お前に頼みたいのは，お前の知恵で私をこの恥ずべき状態から救い出してくれまいかということなのだ。」

実直なシモンはこの言葉に少しばかり腹が立ったが，それでも良き友人ぶりを示し，実に快く言った。「ユーグ様，ただ今私が言いにくいことを敢えて申し上げましたのも，心から貴方のことを思ってのことなのでございます。しかし，

おっしゃるとおり，私の助言を聞いてお暮らしになるというのですから，私の誠にかけて申し上げます。私の申すとおりになさるのなら，貴方をどんな危険や窮地からもお救いいたしましょう。そして，もう一度お金持ちにもして差し上げましょう。」

ユーグはシモンのこの言葉に答えて言った。「シモンよ，その助言とやらを是非聞かせてくれ。そうしたら大いに恩に着るよ。」

「もちろん，誠心誠意お話し申し上げますとも。」とシモンは語った。「私は貴方に幸せになっていただきたいのですから，ユーグ様。さて，私の助言というのはこうでございます。この冬は私のところにお留まりください。そうすれば私の仕事を教えて差し上げますし，その次にどうやって売り買いをするのか，また雄牛や子牛や羊，それに豚の扱い方についてもご教授いたしましょう。買うときや太らせるときや屠殺するときにはどうするのかも。そのうち，一人前になったと認められれば，お金持ちの家の可愛らしい娘を妻に娶ることになるかも知れません。その人はきっと貴方の健康な手足に愛情を感じるに違いありませんよ。そうなれば，遂にはあらゆる種類の商人達と取引きをなさることになるかも知れません。貴方が本当に一人前になったら，私が死んだ後はこの土地財産の全てを貴方に残すつもりです。私には子供もございませんし，これといった身寄りもございませんから。手仕事を恥ずかしがってはいけませんよ。貴方のお母様もここでお生まれになり，お育ちになったのですから。」

これに返答しようとユーグはちょっと考え込んだが，すぐ笑いながら言った。「親切な従兄弟のシモンよ，お前の誠心誠意の助言には感謝の言葉もないが，どうにも気が進まない。私には屠殺するとか，さばくとか，あるいは売り買いするとかいう気などないのだから。それに，父の騎士としての徳を忘れないように心掛けているし，小さい頃からその中で鍛えられてきて，この若々しい身体をこれに賭けてみたいからだ。それなのに，なぜよりにもよって雄牛や羊の屠殺を学ばなければならないのか。私は騎士としてもう幾人もの人間を倒して

きたのだからね。この腕で多くの君主に仕えることだってできるのだ。厩にいる四頭のみごとな雄馬とか，鷲や鷹や鵠あるいは猟犬とかいったものの方が，千頭の雄牛なんかよりも好ましいのだ。それに，雄牛や羊や豚や子牛が鳴いたり鼻を鳴らしたりするのを聞かされるより，太鼓や笛，リュートやヴァイオリン，踊りや歌を聞く方が好きなのさ。」

この言葉を受けてシモンは悲しげにユーグに答えて言った。「従兄弟のユーグ様，私は貴方のためを思って申し上げているのです。私の助言をお聞きくだされば，決して後悔はなさいませんよ。でも今日のところはこれくらいにして，この話は明日の朝まで脇へ置いておきましょう。ひょっとしたらお考えが変わるかもしれませんし，ここはひとつ気を取り直して楽しくやりましょう。」

二人はこうして時間を過ごし，とうとう寝ることになった。ユーグは立派で心地よい寝床をあてがわれ，目下の貧困も気にならず安眠した。それどころか食事の時間まで半日も眠り続けたのだ。しかし，従兄弟のシモンは一晩中眠れなかった。ユーグがすすめに従ってここに居着くのではないかと，そればかり心配していた妻に責め立てられたからだ。それで彼女は言った。「ああ，あんたったら，何のつもりなのさ。これまでずっとたらふく飲み食いして，きれいな女達と暇潰しばかりしていた若者を職につけようっていうんだね。あの人がまた同じことを始めたら，ご自分のお父様の遺産を食い潰したみたいに，親代々の財産や私達の蓄えまですぐにきれいさっぱり無くしてしまうだろうに。だから，こうしたらどうだい。明日になったらあの人に相当の路銀をやってここを発たせるのよ。そうしたら厄介払いできるじゃないかね。損をするんでも，大きいよりは小さい方が我慢できるんだからさ。」 ― シモンがそれに答えて言った。「お前，もうよしなよ。本当に，言われなくたってそんなことはもうとっくに考えているさ。あの人が私の言うことを聞いてここに居着きやしないかと，それが心配なんだ。そんなことになったら，うんざりもいいところさ。あの人に今までの癖を出されたら，俺達の財産なんて一年も持たないんじゃないかと思っ

てさ。」 ― 彼にはそれがひどく心配だった。それに，いろいろな蝿が飛んで来ては鼻にとまったり耳元でぶんぶんいったりするので，ひどく早く夜が明けたような気がした。寝床の中はとても落ち着けなかったので，彼は明るくなる前に起き出し，厩に行ってユーグの馬にできるだけ餌をやり，いつになったらユーグが起き出して返事をくれるかと，どうしてもそれが知りたくて待っていた。もはや正午になるという時刻で小腹も空いたので，ユーグは目を覚し，起きて口笛で愉快な歌を吹きながら自分の馬の様子を見に来ると，何から何まですっかり世話が行き届いていた。そこで彼は礼を言うつもりで従兄弟のシモンに歩み寄った。すると人のいいシモンは気を失わんばかりに驚いた。というのも，ユーグがここに居着くのではないかとそればかり心配していたのに，ユーグの方はそんなことはこれっぽっちも考えていなかったのだ。しかし，ユーグがさらに何か言わないうちに，シモンはそれを押し止めて言った。「ユーグ様，昨夜職につくことをおすすめ申しました時，貴方は仕官すること以外は考えていないと言われましたので，私は夜通しあれこれ考えました。ついては，貴方はまことに長いことそうしてこられたのですから，そのようになさいまし。私の部屋にいらしてください。私は貴方のお母様が大好きでしたし，貴方がこのように困っていると知ったらお母様は草葉の陰でさぞお嘆きでしょうから，路銀を十分に差し上げたいと存じます。」

― ユーグはこれを聞くと，長く遠慮はせず，従兄弟についてさっさと部屋に入って行った。するとシモンは机の引出しから絹の財布を取り出して言った。「どうぞ，お持ちください。この三百クローネは私の気持ちです。」 ― ユーグはいい気なもので，その喜びようといったらなく，従兄弟に大いに感謝した。同様にシモンの方も妻と一緒に大喜びをした。この客を厄介払いできるので，無くなった金を惜しいとは思わなかったのだ。大きな牛肉を焼き串に刺したところだから食べていってくれと従兄弟がどんなに頼んでも，ユーグはもはやぐずぐずせず，食事の時間まで待とうとしなかった。ユーグは愛馬に鞍を

置き，鎧と長靴と拍車を着け，従兄弟と御内儀さんに贈り物と宿の礼を言うと，ひらりと馬に乗って去った。従兄弟のシモンはなおも長いこと帽子を手に戸口に立ち，頭を振っていた。御内儀さんはといえば，両手をスカートの下に入れ，あくびをしたり身震いしたりしながら，明日の晩はどんなにゆっくり眠ろうかと考えていた。

ドローレス：「ねえ，そんなに事細かに騎士の話を読んでいたら，今日中には終わらないわ。」

．．．ユーグは馬でヘンネガウに行った。それはそこで大きな武芸試合が催されることになっていたからだった。 ― これから口にするのも憚られるお話になるのよ。

ドローレス：「私達二人だけなんだから，知ってるなら私にも教えてくれたっていいでしょう。歳は二つ上でも，背丈は同じでしょう。」

．．．ユーグはオランダのいたるところで試合に勝って賞賛を得たが ― あちこちの女と関係を持ったので ― 今度は逃げ出したり，振り切ったりするはめになり ― とうとう腹違いの息子が十人生まれた。彼はそのうちの誰一人も面倒を見ず，ますます冒険を求め続けた。これはまだともかく貴族らしいと言えるでしょうけど，人の道にはかなっていないわ。

ドローレス：「たしかにそうでしょうけど，子供達の方では，ひどい境遇でも生まれないよりましだと言ったかも知れないわ。」

．．．いいえ，きっとそんなことは言わなかったはずよ。さて，ユーグは大いに名を上げ，獲得した金品をたくさん持ってパリに戻ると，従兄弟は彼の美しい馬と豪華な金塗りの甲冑を見てたいそう喜んだ。ユーグが馬を下りて従兄弟に冒険の次第をことごとく話して聞かせると，御内儀さんはたいそう驚いた上，彼が大好きにさえなった。シモンはそれに気づくと大声で言った。「聖ディオニュース様※9，これからは私達のところにお住まいいただきたいと存じます。貴方のために立派な貴族の国を作り，それを守っていく所存でござい

ます。それというのも，貴方が出て行かれてから我が家の財産はかなり増えまして，貴方の財産を買い戻せるほどになりましたから。何しろ故郷には良いお友達がたくさんおありだし，お父上の世話になった分その方々が貴方を助けてくださるでしょうから，立派な奥方をお迎えになることができますよ。」

ドローレス：「そんな人なら私が結婚するわ。」

．．．「なるほど。」とユーグは言った。「お話は確かに承りました。私のことをこれほど親身に考えてくださって，何とお礼を申してよいかわかりません。しかし，結婚なぞまださらさら考えておりません。人目を忍ぶ仲の方がずっといいように思えますので，もう少し幸運を待つつもりです。」 ― シモンはこれには合点がいかなかった。それは彼の細君にとっても同じだった。何しろ彼女は裕福な親戚の娘とユーグを結婚させたかったのだから。

ドローレス：「さあ，早いところ話してちょうだい。小鳥に餌をやるのを忘れていたわ。」

．．．ええ，それじゃいいわ。ユーグがパリにやって来た時，折しもフランスの女王はブルグンド公爵の軍にひどく攻め立てられていたが，彼女は何としても自分を妻にしたがっていた公爵に我慢がならなかったのだ。ユーグがいかに勇猛果敢にパリを防衛しようと，すでに成長してブラバントにいた十人の息子達全員が父の苦境を聞きつけてパリに進軍して来なければ，まもなく戦いに負けてしまうところだった。もっとも息子達は互いに面識がなかったので，各人がそれぞれ別の道を行軍したが，結局パリにほど近いところで全員が落ち合って兄弟の名のりを上げることとなった。すると息子達は互いに謀って，まだぐっすり寝ていた公爵の陣を雷雲のごとく急襲した。ユーグはこの予期せぬ加勢に気づくと手勢を全て率いて出撃し，ブルグンドの者達をさんざんに打ち負かして公爵を捕虜にした。そこでユーグは彼らが自分の息子達であると知って，父親として彼らに接吻し，女王はユーグと結婚した。フランスのあらゆる王家のうちで最大の王家を玉座につけたこの人こそ，彼（フーゴー・カペー）

だった。従兄弟のシモンはユーグの異例の幸運にたいそう驚いた。シモンは一挙にして，一生涯かけてもなれないほどの大金持ちになった。シモンはまた公爵に任ぜられることを承諾したが，それは自分がなりたかったというより細君に強くすすめられたからだった。

ドローレス：「本当に素敵なお話ね。ねえ，クレーリア，お父様もこっそりそうなさっているといいわね。ねえ，お父様が，どの新聞にも出ているけど誰にも正体を知られていないあのパスヴァン・オーグル※10 だったらね，ああ，本当にそうだったらいいのに。」

こう言いながら，二人は優しい親しみを込めて抱き合い，泣き笑いしながら父のことを思った。そして，貴族のあらゆる美と礼儀の手本であるこの人が，どこかで同じような幸運をつかんでいるに違いないと確信し，二人は様々な夢想に耽った。ここで，これに代わって少しばかり考察したいことがある。間違いなく言えるのは，どの民族も様々な名前で呼ばれるたいていは思いがけない苦難に周期的に襲われるのは何とも避けられないが，これは幸運をよいことに次第に出来上がった固有の志操や教養や方向性を吟味するものだということである。内容空疎で妨げとなる奇妙な事柄は消えて行き，真正で純粋な，それ自身が生命を有する独特さこそが真価を認められ，強められて，それ自体に自信を持つことになるのだ。革命の最初の数年間はフランスからの亡命が相次いだが，それはかの富裕な国に住む一流の教養人士の大部分が日々の窮境とこのように戦っていることを示していた。彼らがこの戦いを乗り切ってきた様々な方法は，一般の関心を呼び起こすものだった。実際，すでに以前から多くの人々が，時代の流れは一歩一歩確実にドイツにも押し寄せ，幸福と安寧のために苦心して構築された旧来の諸関係が踏みにじられるかも知れないという予感を抱いていた。今我々は，すでにある家族において，その現れが罪ある側から罪のない側へと侵入していくところを見ているのである。伯爵の借金は家族から贅沢を奪うことになったが，戦争でこの地方がこれほど破壊されなければ，彼ら

が必要なものにさえ事欠くことは決してなかったであろう。このような困窮の時代には，それに立ち向かうために誰にもできる最善のことは何かということは，ほとんど問題にならない。ここではそれよりも，誰にも見過ごせないことが現れて来て，事あるごとに解決を迫ってくるのだ。ドローレスはあの話をきっかけに，憧れの気持ちを秘めながら，結婚するという意志が貴族からすっかり失せてしまったようだと嘆き始めた。彼女は，輝かしい結婚こそが女性の最高の褒賞であり，誰もがそれを求めて試合に挑むと言うのだった。

「みんながそう思うわけではないわ。」とクレーリアはむっとして言った。「私は結婚相手を探すより，死ぬまで自分の手で働いて生きて行きたいの。」

「仕事なんかするから卑しい気持ちになるんだわ。」とドローレスはつい口を滑らせてしまった。

第　五　章

カール伯爵

そこへ老執事がいつものように正装して，幸福だった時代と同じ流儀で彼女達のところへ入って来た。二人は昔どおりにお世辞を言ったり，彼をからかったりした。しかし，老執事はいつもなら彼女達の父親のことや，食事のときにたくさんワインを注いで回ったことや，主人に邸の建設を思い止まらせようとして，かえって首になりそうになったことなどを話すのに，今日は全く様子が違って，楽しげに，子細ありげにこう話し始めるのだった。彼は，幸福とはしばしば思いがけずやって来るものだなどとくだくだしく語ったあとで，おもむろにこんな話を持ち出したのだ。実はある若い伯爵※11 がおられます。学生なら誰でもそうですが，半ば兵隊風の，半ば奇抜な，いっぷう変わった身なりをなさっておいでで，背は高い方ではありませんが，本当に品のいいお顔

立ちで，黒目がちの，髪の縮れた方でございます。その方が，普通なら避けて通るような道を，古い岩山や谷間を越えて，当家の庭園まで忍んで来られたのです。笠石や多くの石が持ち去られた塀越しに見ると，何と驚いたことに，邸の前に二人の美しい乙女がいるではありませんか。どこから見ても高貴な身のこなしから王女と見紛うばかりでしたが，洗濯物を広げて日にさらしたり，汚れを取ろうと水をかける二人の仕事の様子を見て，彼はそれをどう考えたらいいかと迷い，つい声をかけそびれたのです。この若い伯爵様はできる限り二人に近づき，榛(はしばみ)の木の陰に隠れ，二人が仕事をしている間中ずっと眺めておられると，そのあとさらに，二人がよくなついた鴛達に口移しで何やら緑色のものを与えているのが見えました。それから二人がその小鳥達を手に乗せて家に入ってしまうと，その方はほんの一時間でいいからそんな小鳥になりたいと思った，というわけです。 ― 「まあ，その人おかしいんじゃないの。」とドローレスは実にそっけなく言った。 ―「いいえ，」と老執事が言った。「これは恋をする者なら誰もが抱く昔から変わらぬ正直な望みなのです。恋する者はいつも，もっと気に入られようと実際以上の者になりたがるものなのです。私も若い頃には全く同じでした。」 ― 娘達は笑い，老人は話を続けた。この伯爵は宿にしていた三つの地球儀亭の主人のところへ行かれ，ごく内密にその日の一件をお話しになり，特に目を惹いた方の娘のことはとりわけたくさん話されて，その娘について是非とも知りたいと思われたのですよ。娘達は顔を見合わせた。するとクレーリアが落ち着き払って言った。「きっとあなたのことだわ。」 ― 「いいえ，違うわ。」とドローレスは答えた。「それはお姉様のことよ。だって今日お姉様はあのきれいな赤いスカーフをしていらしたもの。」しかし，彼女は心の中ではこう考えていた。その方が探していらっしゃるのはきっとこの私の方だわ。口移しで小鳥に餌をやったのは主に私の方だったし，私の方がふっくらしていて，目鼻立ちだってはっきりしているし，頬も私の方が赤いんですもの。それから目だって私の方がずっと表情豊かだし，髪は二人

とも同じ色だけれど，私の方がもっと捲き毛だもの。それにみんな私の方がきれいだと言うもの。彼女はこう考えながらも，ひどく嫉妬を感じるのだった。まるでその若者が徳と悪徳の間にでもいるように，彼女ら二人の間で迷っているかに思われたのだ。老執事はさらに話を続けた。抜け目のない宿の主人は，当家になお二三の請求があるといってすぐに遣いをよこしましたが，この私に，このきれいな家を見学するという口実で，カール伯爵と名のるこの若者を美しいお嬢様方のところへ連れて行ってくれというんでございます。いつだって何とかなるものだ。案ずるより産むが易しだ。そうなれば皆さんが助かるじゃないかと，こう申すのです。　―　クレーリアはこの提案にあれこれと真剣に異議を唱えて，誰も知らない若者を，下心を知りながらそのように迎えることは，自分達のしきたりに全くふさわしくない。自分はその男に会いたくない，と言った。ドローレスは自惚れを掻き立てられていたので，それに水を注すこのような言葉に激しく反対した。これまでとても多くの男達に会ってきたのに，なぜ今回に限っては自分達のためにならないと言うのか。その男から何か新しい話が聞けるだけでもいいではないかと。それから彼女は興奮して言った。「ねえ，クレーリア。結婚するつもりがないのなら，どうしてこの間小指のところの皺なんか見せて，手のひらを曲げてそこに一本皺が出来るのは結婚相手が一人現われる徴だなんて言ったの。それから私の手を見て，私には一本半あるなんて言ったわよね。ほらご覧なさい。結婚したくてたまらないんじゃないの。だからそれを認めようとしないんだわ。」　―　クレーリアは，ドローレスが他愛のない迷信をこのようにわざとねじ曲げたことに腹を立て，椅子から立ち上がると部屋を出て行った。愚かしいずる賢さとないまぜになった意図的な曲解ほど人を深く傷つけるものはない。老執事はその時，全くどうでもいいようなことを罪と考える，自分よりも高い教育を受けた告解者の傍らに立つおめでたい聴罪司祭のように突っ立っていた。とはいえ，クレーリアがあんなに反抗的に出て行ったので，彼はクレーリアの方に非があると思い，一時間後にその

男を連れて来てほしいというドローレスの願いを叶えようと急いだ。さて，クレーリアは今の口論をすっかり忘れようとして自分の部屋に戻り，祈祷書の前に座ったが，ドローレスは大急ぎで右へ左へ歩き回り，二人の衣装を掻き集め，何とか見られる衣装を作ろうとした。それは輝くように白く清潔なものだったが，やはり余分な縫い目が縦横に走り，まるで魔法解きに使うような代物になった。ドローレスはそれを仕上げるともう，下ろした鎧戸の隙間から，通りをこちらにやって来る人達をそわそわと窺ったりしていた。その間にも鏡で自分の姿を眺めては良い表情や上手い言い回しを工夫し，それから，子供の時分にお世辞を言ってくれた侯爵や公爵達もしばしばほとんど一顧だに値しない者達だったことを思い出して，声を立てて笑うのだった。とうとう黒髪の上に被った緑色のポーランド帽と，緑色の身軽な軽騎兵の服とゲートルと旅用の靴が見えた。それらは，執事から聞いた話では，身分の高い方の印であるということだった。執事がその男に付き添っていた。ドローレスは自分の惨めな部屋を見られたくなかったので，その男とは偶然を装って階段で会おうと思った。

第　六　章

学生達

上機嫌に街道をこちらへ下りて来るこの若者は，大きく迫り出した額に生える一文字の眉に重く暗い一片の雲が前兆のように重くのしかかってはいるが，その人柄を詳しくお知らせする前に，彼についてざっと皆さんに紹介しておくことにしよう。カール伯爵が学生であることは，すでに執事から聞いたとおりである。だが詩神ミューズのことを何も知らないような人々は，一体どうやってミューズの子を見分けるのだろう。これはなかなか説明が難しいことで

ある。衣装は必ずしも手掛かりにはならない。他の多くの人々がそれを真似るし，事実，時代が違えば衣装もまちまちだからだ。むしろ，服の着こなしとか，辺りを見回し，歌を口ずさみながら街を歩く様子でそれとわかるのだ。ドイツを北から南にスイスまで，さらにイタリアの海に浮かぶ美しい島々まで学生達と陽気な旅をしたことがなくとも，一度はこんな一群に出会ったことがあるだろう。その一群とはつまり潑剌と頬を赤く染め，希望に胸を膨らませ，ドイツのよその土地と同様に住民の暮らしが良かろうと悪かろうと，もうそこで至福の土地を見つけたと思い込む者達のことである。毎日使っているために人目を惹かなくなってしまったものについて，人から幸せなことだと褒められたりすると，とても嬉しいものだ。誰もがこの上なく上機嫌になって，そのお返しに，無邪気に驚嘆なさる方には思いもよらないでしょうが，人にはどこでも何かしら心配事があるもので，いつ何時ふさぎの虫が鳴き始めないとも限りません。いやそれどころか，山々の眺めがどんなに晴れやかでも，いつも人間の狭い住処から立ち昇ろうとして，しばしばそこへ抑え込まれてしまう煙を追い払うことはできないのですよ，などと言う。学生時代の博学の物識らずとは何と好ましいことか。学生たるもの，様々なものごとに関してこんな観察もできようが，次の瞬間にはまた忘れてしまっているかも知れないのだ。靴の埃と新鮮そのものの果実についた埃は同じ性質のもので，世に出てまだ何と日が浅いかを示しているのだ。彼らはいずれはきっと一日で何マイルも馬車で旅することを覚えるだろうが，しかしそうなると，ほんの数マイルでも自分の足で歩いて来たという喜びはもう戻っては来ない。この陽気さのために宿の主人も彼らが好きで，まるで燕を待つように彼らを待つのだ。どんなまずい酒でも学生達には十分美味いので，思い切り騒ぐ機会があると，放歌高吟し，冗談を飛ばして，自然の美しさをことごとく見尽くして擦りむけてしまった足をその間に食卓で休めるのだ。普通の日なら黙っていつもの酒量に満足しているような上級生達でさえ，このときばかりは酒が進み，なみなみと注がれた酒を持っ

て月明かりに照らされた低地へと出かけて行く。そこでは彼らも到達できないものに憧れを抱き，つまらないことで歓声を上げ，目の前に不倶戴天の敵※12でもいるように，自分の帽子を穴だらけにしてしまうのだ。※13 まことに，ドイツが兵隊を雇い入れることがあれば，たとえ学問をしなくても，兵隊は学生のように暮らす必要がある。あらゆる束縛から解放され，名誉だけに従って，お互い平等に。そうすれば，その中から最も気の利く勇気のある者が出て来て，学生が先輩格になるように，将帥へと昇りつめて行く。 ― そのような旅の仲間を作る機会は人生経験の始めにあるものだが，その一つは，金と必要は大概つり合いが取れないことからきている。それで，多くの陽気な兄弟達は飲み代をつけにしたまま，ありもしないのに，後で送るからなどと約束するのだ。ちょっとばかり金に困るというのは実に結構なことだ。金が無くてもやって行くことを覚えるから。わずかばかりの下着類や愛読書，それに作家気取りでつけ始めた二三冊の日記帳以外には何も入っていない掛け鞄を，大真面目になって飲み代のかたに取るほど冷酷な酒場の親父がどこにいようか。ちょっと驚くようなことがあっても痛くも痒くもないのだ。きわめて多くの者達はしかし，そのような旅で別の経験も重ね，旅に出た時と同じく上機嫌で家に帰り着くことはない。旅人は足を引き摺りながら故郷に向かい，もはや遠くを見やることはない。森はもはや陽気にざわめきかけることはなく，さえずる小鳥達も姿を消してしまったようで，木々の梢はびっしりとまった鳥でたわみ，それらは深い霧の中に飛び立って行く。木々や衣服や旅人の目や，あらゆるものから雫が滴り落ちる。そしてその目はますます遠ざかってしまったものをいつまでも捜し求めるのだ。彼が岸沿いに歩いて行くその川が下流で幅を広げるように，彼の苦悩は一里ごとにつのる。今や川はすでに多くの黒い船を浮かべ，彼が残してきた恋人にいずれ一筆書いてはっきりと伝えなければならない多くの思いを運んで行く。そしてかつては軽い習慣にすぎなかった仕事が，今度は職務やパンのために行われることになるのだ。よく聞く話だが，男の方は待つの

がいやだし，旅で知り合った女の方も嫁に行きたがるものだ。我がカール伯についてはどうなるのか。彼もまた学生達の一群とともに歩いて旅に出たのだから，このありうる場合について喜んでお話しすることにしよう。だが，それはもとよりすっかり当てはまることはない。というのは，結婚するつもりだったにしても，伯爵は人様のために働くという束縛を受ける必要はなかったからである。伯爵にはかなり財産があったが，それでも後見人は思慮深く彼の学生生活のためにはごくわずかの金しか出さなかった。後見人達の考えでは，学業は伯爵が科学的な農業経営者になるための予備教育にすぎなかったのだ。どこかの君主に仕えるよりは，所有地の管理をする方が彼の能力や天性に合っていると思われたからである。伯爵は十人余りの同郷の者達と大学から徒歩の旅に出たのだが，それぞれに道楽があって一人また一人と脱落し，一行はついにばらばらになってしまった。薬草を集める者があるかと思うと，またある者は石を採集するという具合だった。彼の楽しみは山に登ることだったので，歩きにくい山道を通って庭園の丘にたどり着いた。すると，彼はそこで初めて太平洋を発見したときのバルボア※14 のような幸福な気分になり，眼下に例の二人の娘の姿を見つけたのだった。まるで目の前に広がる穏やかな緑色の海に二つの幸福の島が浮かんでいるようだった。そもそも彼はその瞬間に彼女達二人に心を惹かれたのだが，それは，この年頃でしかも徒歩旅行に熱狂して気が大きくなっており，窮屈な部屋と黴臭い講堂で半年も過ごした後に，再び澄み渡った青空の下を朝から晩まで旅をしていればこそだった。ところが，塀を跳び越えようとしたとき，茨の茂みが彼の服にかたく絡んでしまった。罰と愛は往々にしてつきものである。それで伯爵は，これは正しからざる道を通ってこの神聖な場所へ立ち入ることはならぬという愛の警告だと思い，しかたなく彼女達をできるだけ長く，できる限り近くから眺めることで我慢した。宿の主人が彼女達の身分と運命，それにひっそりとした暮らしぶりなどについて教えてくれたが，それは娘達と懇意になりたいという伯爵の欲望をさらにつのらせていたの

だ。その当時の彼と同じ身分の者達はたいていが盆暗貴族だったが，伯爵はそうではなかった。彼はそういう貴族達の間では革命家として通っていた。しかし，彼は家風であるとか，一族の名誉といったものを守ることは知っていた。それは，かつて自らを君主と同じように尊重していた者達の家々に依然として受け継がれてきたものだった。自分自身と同じ境遇であるというのは彼にとっては良い前兆だった。女性らしい優しさ，控え目な様子，愛想の良さといったすばらしい想いが伯爵の脳裏に浮かんだが，彼にはそれが二人の伯爵令嬢において初めてはっきりと姿を現わしたのだった。

第　七　章

カール伯爵，初めて二人の伯爵令嬢を訪問する

いざ邸の戸口に立ってみると，買いたい物があると嘘を言って令嬢達に近づきたいという欲望を隠すのは，彼にはやはり品のないことに思えてならなかった。だが今更どうにもならなかった。背後の扉はもう閉まっていたのだ。すでに階段の柱の間(あいだ)から伯爵令嬢ドローレスの赤い縞模様の白いドレスが見え隠れし，丸天井に彼女の足音が響いた。彼女は歩み寄ると，衣装のまずさに気づかれてはと思う恥ずかしさから，二言三言よく聞き取れない言葉を口にして彼を迎えた。ところが，彼女の魅力的な眼差しのせいで，彼の言葉は彼女よりさらに不明瞭になった。明るい茶色の目には，絵にも描けないような光が仄かに宿っていたのだ。だが，何を見ようが何を行おうが，その結果はそれがなされる時機次第である。もし彼がこうして初めにクレーリアに会っていたら，おそらくクレーリアの方に参っていただろう。それは彼が今，姉よりいっそう美しくきらびやかな妹の虜になったのと全く同じことである。執事は二人の世話を焼きながら，階下の食堂に取り付けられた便利な設備についてあれこれ長々と話

し，以前は水道で飲み物を冷やしていたのだが今は塞いであるなどと言った。
一　邸の内壁の装飾はほとんどが建築術にかなったもので，石か石膏のどちらかで出来ていた。老伯爵は名画をたくさん所有していたので，どこであれそれらをありきたりの壁布にある織模様と一緒に置くのを嫌った。そうすると双方の価値が下がるからだ。織模様の機械的なところは見る人の目を甘やかし，本物の絵が持つ生命感の中にさえ何かしらその種のものを見させる。一方，織模様は，本物の芸術作品がないときに持つ好ましさを失うのだ。これらの名画は売られてしまい，全く同様に，安楽椅子やテーブルなど実用品もことごとく売られてしまった。また狂暴な戦（いくさ）の女神がときおりあちこちの壁に松明の火をなすりつけはしたが，高貴な建築術にかなったこれらの装飾は，こうして部屋が空っぽになったところを見てみると，明らかに以前よりも偉大にして荘重な観を呈していた。これほど壮麗なものを見たのは伯爵はこれが全く初めてだった。彼は買う気などさらさらなく足を踏み入れたのだが，今やみごとに均整のとれたこれらの部屋で暮らすことこそ無上の幸福と考えるにいたった。この矛盾と不均衡の全てが人知れず自分の中で正されることになればいいと思った。ドローレスのようなみごとに均整がとれたみずみずしい生の女神まで自分の側（そば）にやって来るに違いないとまでは，彼はまだ思わなかった。彼女の美しさ，眉の形，美しい歯並びは，どんな品格のある柱の配列でもこれで説明できるほどだったが，これらはこの建築のすばらしさの与える影響にすぎないかのように思われた。あるいは彼女自身が建築の女神であるかのように彼には思われたのだ。彼はこのようにすっかりと，彼女に，彼女の言葉に，彼女のしぐさの一つ一つに感動してしまった。こうして二人は美しいいくつかの階を昇って行った。伯爵は全体の景色を見渡したいと言って，もう一階上に昇って最上階に着いた。そこはかつて召し使い達にあてられていた所だったが，今は令嬢達が住んでおり，ドローレスは絵を描いて装飾にしていた。彼女はそこについて行くのはどうしても嫌だったが，何の言い訳も思いつかなかった。伯爵はこれらの絵の際

立った出来栄えと美しく確かな輪郭を褒めそやした。ドローレスは，こんなものは私のくだらない遊びですわと言った。彼には，まさかこれが彼女が描ける最高のものだとは思えなかった。それで唐突に，貴女はこれまでに会ったうちで最高の画才をお持ちの方です，と尊敬の言葉を口にした。彼は称賛しながら次から次へと絵を見て行き，気がつくとクレーリアの部屋の前まで来ていた。ここにも人はいないのだろうと思ったが，中に誰か人がいるのを目にして，それが誰とも確かめないまま，失礼と言って急いでドアを閉めた。彼はすぐ令嬢ドローレスの方を向いた。彼女は困惑した様子で彼の後ろに立っていたが，それは，自分が先に一番良い衣装を取ってしまったため，姉が十分な身なりをしていなかったからだ。「今のご婦人はどなたですか。」と彼は言った。— 「侍女ですの。」と令嬢は言った。すると執事は傍らには聞こえないように，ドローレス様はお姉様から求婚者をだまし取ったばかりか，今度はそのお姉様を自分の姉でないとまでおっしゃるのか，とぶつぶつ言った。それというのも，彼は幼い頃からこのクレーリアの方をはるかに可愛がってきたからだった。彼がここに残ったのも，もとはと言えば，クレーリアにできるだけ良い身なりで庭に出ようという気になって欲しかったからだ。それが今やドローレスが伯爵の腕にすがってその庭に急いで行くところだった。この二人はちょうど緑の広場の前を通りかかったが，伯爵はそこにあの麻布がないと知り，溜息をついた。それは朝の陽光の中で自分をまぶしがらせたものだったから。その輝きはことごとく，彼を案内する美しい女性に移っていた。彼は，かなり持って回った言い方で，相手の機嫌を損じないかと気にしながら，私はもう今朝ほど貴女をお見受けしているのですと言った。彼女は，下女のするそんな仕事をしているところを，気づかぬうちに見られて恥ずかしかった。彼女は，もうそれ以上おっしゃらないでと手振りで彼に合図をしようとしたが，彼はその両手を自分の口に押し当てた。そうするうちに二人は丘の上に着いていた。そこには忍冬（すいかず）が茂り，それはベンチそのままの石の真上で園亭のような丸い屋根になり，落日の華麗

さと，美しい谷間になおも送っているその幾千もの愛の眼差しに挨拶する最も美しい場所に思えた。伯爵は石の上に腰を下ろした。「まあ，いけませんわ。」と令嬢は声を上げて言った。「今どこにお座りになっているかご存じですの。」伯爵はさっと立ち上がると，石に楽譜と歌が彫り込んであるのがわかった。彼が眺めていた太陽の光を受けて，枯れ果てた地上に綴られる春の文字のように，緑の文字が現われた。いささか恥ずかしく思いながら，彼はそれを声に出して読んだ。

乙女よ，汝の男子（おのこ）が
最後の夕映えの中を
我が密やかなこの墓所に汝を連れ来ても
敢えて自らそうせずば，
我に敬意を表し彼に接吻せよ，
それなん我への追悼のミサなり。
汝等に接吻の術（すべ）を教え得れば，
我は決して忘らるることなし。

新たな旋律（メロディー）が生まれ
我が歌を押し退けるも，
我が耳の聞きこし限り，
接吻は繰り返され，
またこれなる
慈しみつつ作りし我が愛の譜より，
死者の許にある我になお
繰り返しの時はすべて響き来る。

そこでドローレスは，彼女の父が，長年の親友であった陽気で瞑想的な音楽家をここに葬り，この美しい場所に通じる道を最初に見つけて均してやったのだと伯爵に話して聞かせた。伯爵は持ち前の美声でこの曲の素朴で快い旋律を歌った。陶然とした彼の目の前で残照が平原の上でゆらめき，山々の奥を見やった。彼は彼女の目をしっかと見つめたので，彼女は目をそらすことができなかった。ずいぶん以前から彼女の前に現われたうちで最も好ましい男性だったのだ。彼女は彼の中に自分の出自の輝かしさが再び現れるのを見た。彼女は再び彼女の戸口の前を音を轟かせて馬車が走るのを聞き，夕空の光を反射する邸の窓の中で，全てが以前のように蝋燭の光に照らし出されているのを見た。あちこちの茂みには合唱隊が潜んでいるように思えた。それで彼女は，彼が唇に押し当てた清らかな接吻を拒まなかった。話を急ごう。何しろ，単純な状況では世の中のことは全て似たようなものだから。それに，誰の心にも十分に感情が備わっているので，いかに感情に乏しくても，言葉で言われるよりは生き生きとこのような瞬間を我がこととして考えられるからである。この接吻の後ではこの上何を言っても虚しく味気ないばかりだと思えたので，伯爵はもう一度接吻をすると，顔を赤らめている乙女に別れを告げ，素早く生垣と塀を越えて山の中へ駆け込み，これほどひどく自分を興奮させる嬉しさを一人で噛みしめることにした。ところが，朗らかな気分になるどころか，ますます気持ちが沈んできた。何か彼の心の中で叫ぶものがあり，それがとうとう口をついて出て来た。

彼女は別れに唇をくれた，
それが僕を惨めにする，
僕に憐れみをかけたのだ，
どうしよう，誰に言おうか。
心にしまっておけない，

胸が張り裂けそうだ，
世間は知るよしもない，
僕しか知らないことを。
夕べがこれほど朱に染まっていることを
まだ誰も知ってはいけないのだ。
ああいっそ僕を殺してくれたらよかった
あの最初の，最初の口づけの時に。
苦しみから逃れれば安息を得て，
歓喜のうちに多くをなせようものを，
それが今や重い旅の靴を履いて
こうして愚かに踊っていようとは。

実際に，彼は内心歓声を上げつつ滑らかな樅(ぶな)の木に抱きついていた。そして，誰も踊る相手がいなかったので木の周りを舞い踊り，声を上げて笑った。彼の心に湧き上がった諸々の感情が一つになった興奮状態は次第におさまっていった。とうとう彼はこう確信した。愛とこれに応える愛という二人の神は，こんなにも長い間別れ別れになって互いに捜し合いながら地上をさまよっていたが，自分達二人の中で完全に出会って挨拶を交すことができたので，永遠に二度と再び離れ離れになることはないはずだと。宿に帰った時，彼は遅くなってもなお日記を書こうとしたが，我が身に起こったことを表現することができなかった。彼は，結局横になったものの眠ることもできず，小夜啼鳥とこれと競い合うようにざわめく川に歌いかけた。

明るすぎて眠れない，
夜中に昼が現われて来たのだ，
魂は港に憩い，

僕はこんなに朗らかに目覚めている。

僕の魂は抜け出した
初めての口づけで,
なぜこんなに苦しいのか
魂は家を見つけたというのに。

魂はそれを見つけたのだ,
彼女の美しい唇の上に,
おお何たる至福の時か,
我が身にこんなことが起こったとは。

今となってはこの上何を見ろというのか,
ああ全ては彼女の中にある
何を感じ，何を求めろというのか,
全てが我がものとなったというのに。

僕には心に思い,
心を幸せにするものがある,
五感の全てが
彼女に夢中なのだから。

第　八　章

カール伯爵，ドローレス伯爵令嬢と婚約する

翌朝，二人の間であらゆることがはっきりと話し合われた。二人は自分達の婚約が成ったのだと互いに理解したが，そのくせどうすればいいのかわからなかった。伯爵は指輪を持ち合わせていなかった。そうでなければこの婚約の儀式も行われたことだろう。伯爵は大学から優美な金の指輪を送ろうと思い，自分の髪の毛を一本抜いてドローレスの美しい指まわりを計った。そこにクレーリアが入って来た。伯爵は彼女を一目見て，大いに心を動かされた。彼女はすらりと背が高く，額がひいで，口元は上品で，目は澄んでおり，誰もが彼女に注目せずにいられなかったのだ。クレーリアは親しげに伯爵に近づき，あまりに性急に妹と婚約したことを咎めはしたが，それはとても好意的だったので，二人は彼女に接吻せずにはいられなかった。まだ若い頃から伯爵にはある種の寓意的な神話がつきまとっており，彼は妹に愛を見出したように，姉の方には友情を見出したと信じた。事実そうだったのだ。彼女が控え目にしていればいるほど，彼女の豊かで生真面目な精神はこの愛する二人を退屈による倦怠感から守ってくれた。何しろ倦怠感というものは，ことあるごとにどんなに言葉を尽くして幸せだと語っても，控え目な婚約期間を全く不快なものにしてしまうからだ。ここで，自分自身で体験したり，幸福な人々から知らされたり，あるいは書物で読んだことがあるように，愛に包まれ，善良なクレーリアの思いやりのある友情によって活気づけられた数週間のことを考えてみよう。クレーリアは母の優しさでドローレス達二人を見守り，二人のことで喜び，他のどの男達にもまして伯爵を敬い，賛嘆していたのだ。ドローレスは，自分が伯爵を愛していると信じていた。彼女の希望は全て彼にかかっていたのだから。実際，これ以上近しく付き合ったところで所詮伯爵の魅力が増すことはなかっただろうが。伯爵のドローレスに対する愛情はこれ以上に増えも減りもしなか

った。それが愛だった。こうして伯爵は人目につかずに，本当の故郷のように思われたこの町の愛に溢れた一角にこもって全休暇を過ごしたのだった。滝と氷の海と聖なる自由の寺院と不滅の戦場の遥か彼方のスイスは，彼にとっては自分の世界の外にあった。時に伯爵は，何日もこの乙女達のところで無為に過ごしていることで自らを咎め，また，自分が彼女達にとって無用な人間になってしまうのではないかと恐れもした。しかし，すると乙女達は夜毎に，明日も早くから来て欲しいと頼むのだった。乙女達はあるときはギターを，またあるときはスペイン語を教えてもらいたがった。母親の行き届いた教育のおかげで，彼は教養階級のあらゆる技能と知識を身につけていたのだ。習得したものをこんなに美しい娘達に伝える楽しみによって，彼自身の中により美しい姿と秩序が養われたのだ。彼は自分の蓄えを知り，そして使うことを学んだ。彼はひょっとすると，他の学生達が恋愛沙汰で失うのと同じくらい，多くのものを自分の恋から獲得したのかも知れない。クレーリアは彼に，恥ずかしがらずに宗教に心を開くよう勇気を与えた。その勇気を彼は偏狭な野心家や，傲慢な冷笑家のせいで失っていたのだ。彼は恥ずかしがらずに，より高い生とその感覚的な啓示への信仰を思い切って告白した。彼はクレーリアが自分を理解し，尊重していることを知っていたが，しかしこのような心は彼のドローレスにはおぞましいものであることにも気づいていた。彼はそのことをあれこれ考えていると，まもなくこの相違を取り除くことができた。彼は神と世界，全てを自分から放さず，自分自身の中に感じ敬うのは最高の無垢だと思ったのだ。恋する者は，自分がどうしても知りたいことについては，これほど容易に自分を説き伏せることができるのだ。彼は彼女の絵を描いては何度も描き直したが，遂に満足のいくように完成することはできなかった。それは彼女がもっと美しく生き生きと見せようと，顔をむやみに動かして表情を変えたからだ。そのために彼は絵を完成させようと休暇期間を越えてもなお町に留まることになった。そのようにしばしば彼女の目をのぞき込むのはとてもすばらしい時間

だった。ドローレスも伯爵を描こうとしたが，彼女は忍耐心がないので，それは戯画になってしまった。失敗を隠そうとして徐々に全てを誇張したのだ。彼は自分が彼女の目にはそのように映っているのだと知り，自分自身に驚いた。だがここで本心を言えば，戯画を描こうとする若い娘なぞは魔女裁判にかけてやりたいくらいだ。戯画を描くなどというのはまっとうなことではなく，心底厭わしいことだからだ。もしも一人の乙女にとって人間の美が神聖ですらないとすれば，一体何かそれでもなお彼女を人間的にしておくことができるものがあるのか。人間の美はどこでもなかなか出会えるものではなく，それは今やさらに正真正銘の歪曲された像によって消しがたい印象となるので，歪めて描かれた不幸な人と対面するときには決まって，最後の隠れ家からますます消えて行ってしまうのだから。伯爵はまもなく，我々の構想力の前に事実恐ろしく角張り歪められた姿を現わすことになる　―　神かけて言うが，国家全体の安寧が危険にさらされているのを見て絶望的になっている政治家しか，厚かましくも個々の人間における神の似姿を台無しにすることは許されないのだ。そのいい例が英国である。ドローレスがどこかで出会ったあらゆる種類の罪のない人々を絵に描いて見せると，クレーリアはしばしばこのことをドローレスに言ったものだ。ドローレスはしかし，これをそんなに真面目に受け取ってはいけない，それに誰にだって冗談だとわかるのだからと言うのだった。そうこうするうちに，伯爵の気前の良さによって邸の家政にはいくつかの変化がもたられていた。彼は，常々他のいろいろな機会にこの二人の貧しく美しい娘達を援助してやろうという詳しい熟慮や計算をしないわけではなかったのだが，とうとうある晩のこと目を伏せながら宿の主人に向かい　―　この男が彼に邸での初対面の手引きをし，娘達の差し迫った困窮まで話していたのだ　―　きっと口外しないという条件で旅費の三分の二を手渡した。そして，それを彼女達の父親が帳簿に記入するのを忘れた内緒の古い借金として，債務者の名を伏せて令嬢達に届けるように頼んだ。主人はとても快くその依頼を引き受けた。しか

し，彼は人柄が人柄なのではっきり本当のことを言った。事実，彼は債権者のうちではもっとも執拗だったので，明らかに大枚といえるこの金をそのまま娘達に渡していたら，それこそあまりにも不自然であったろう。クレーリアは，この金を受け取るわけにはいかないときっぱり言った。おそらく自分だって大きな財産を持っているわけではない若い男の人から，そのように大きな金額を受け取るのははしたないことだわ。そんなことをすれば彼を借金に駆り立てることになるし，彼とはこれまで良い関係だったのにそれが全くおかしくなってしまうのよ，と言うのだった。ドローレスはクレーリアの間違った自尊心を非難した。自分だって，世間や男友達に気兼ねせずに暮らせるようにって，今朝がた寝床の中で神様に援助をお願いしたばかりじゃないの。ろくに物を食べないとそのうち体を壊してしまうわよ。この前だって痙攣を起こして倒れたけど，それがいい証拠じゃないの。もうたくさんよ。私達のためなんだからそのお金はいただくわ。私は妹としてお姉様の面倒を見るつもりよ。　―　そう言ってドローレスはその財布を受け取った。すると，天井まで跳び上がらんばかりに喜ぶものと期待していた宿の主人はかむりを振って，帰る途々，悪魔は貧しい人々の高慢さで自分の口を拭くものだと心中考えた。クレーリアには全部が全部正しいとは思えなかったが，妹の良い意図は尊重した。しかし，まもなく妹によってその金額の大部分があらゆる装飾の類に支出されるのを見たとき，クレーリアは何と驚いたことだろう。クレーリアは注意を促した。ところが，ドローレスは気分を害して，伯爵が私を愛しているからこれほどの金額が家に入って来たということを考えてちょうだい。だから私も彼のためにこれを遣うのよ，と言うのだった。クレーリアは無駄と思いつつ，もしそれを伯爵のために遣うというのであれば，伯爵自身にこの町での滞在費用を安上がりにしてやる方が良くもてなすことになるのだと言って注意を促した。しかし，ドローレスは，自分たちは身分にふさわしい準備をすることもできなければ，そのための道具も使用人もないし，とにかく自分は決めたのだから，あれこれ言われても考え

を変えるつもりはないと言った。ドローレスは我が身と部屋を飾り，それから姉も飾ってやり，長いこと口にすることができなかった御馳走も用意した。だが，二人の日常生活は以前と同じくつましいままに過ぎていった。伯爵は自分の策がうまく行ったと信じていた。ドローレスはいつもと変わらず至極屈託なく伯爵に挨拶した。ただクレーリアは少しばかり決まりの悪い思いだった。二人の暮らし向きがしばしの間良くなってみると，彼は密かにこの気持ちは慢心ではないかと考えた。たしかに，母はしばしば私に実直な人間ほど慢心には用心するようにと言っていた。私自身も機会があれば，用心するようにとそのような人々に言わなければならない。ここでお許しを願って若者達に真剣に警告申し上げたい。人生のあらゆる展望を色眼鏡で歪めることなく，自分自身で経験を積むことが大切だ。そのためには，いやな経験ばかりしてきた人間どもには注意をせよ。自分自身を全世界の中心と考え，「徳においても悪徳においても，女とはこんなもの，男とはこんなものだ。」と言って憚らない人を恐れよ。なぜなら，その男の小さな世界では人々はしばしばまさにそのように描かれてきたからだ。観察というものが絶えて行われなくなり，不幸のために硬直した彼の水晶体を通して見えているのは，永遠に前進し，全世代を通して形成を続ける世界が，ばらばらの破片になってしまった様子だけだ。彼を敬い，その言葉を聞け。そうすれば君は賢く思慮深くなるだろう。しかし，いたるところでまず自分自身で観察せよ。この世では同じことは，徳においても，悪徳においても，二度と再び現われることはないのだから。そういう男は夢の中では世界の上に立っているのであるが，その実世界の下の深い所にいて自分の墓を作っているのだ。しかし愛すべき若者達よ，諸君は目覚めて，働き，薔薇と百合の花が咲いている限りは，薔薇の家を建て，それを百合で覆うべきなのである。

第 九 章

貧窮のカール伯爵。大学へ戻る

伯爵は，愛するドローレスが装身具を喜ぶのを見て，こうしてささいなものに趣味を持つのは実に感じ良く乙女らしいと思い，何かと理由をつけては彼女にこの種の贈り物をした。あるときは，貧しい女商人が安い値段で結局何か売りつけていったし，またあるときは，彼女を驚かそうと彼が人形を美しく飾り立てておいたりしたので，こうなるとさながら歳の市だった。クレーリアには文学書を数冊と，それに彼自身の詩をたくさん贈った。これらの詩はたしかに，泡ばかり立つ飲み物のように，爽やかな液体よりも細かく輝く泡で酒杯を満たす体(てい)のもので，彼は妹の方に捧げる詩としては不出来すぎると思っていたが，逆に妹よりは姉によって含蓄のある内容と受け取られた。こんな出費を重ねるうちに旅費の残り三分の一も知らぬ間にすっかり消えてしまい，ある日ドローレスに小さな指輪を買ってやろうとしたとき，彼は手元に一文も無くなっているのに気づいた。彼は愕然として，軽い眩暈すら覚えた。こんなことは全く初めてだったので，一度うろたえると彼は何度も，落ちてくる屋根瓦にでも当たって死んでしまいたいと思ったほどだ。このように金に困りでもしなければ彼はなかなか魔法の邸を抜け出せなかったろう。ところが，金持ちの同郷人数名が彼の大学へ行く途中でこの地を通りかかり，彼が貧しい二人の娘と付き合っていると聞くと，金を突き付けて有無を言わさずその馬車で彼を一緒に連れて行くことになった。ここで彼の別れの場面を物語って自分まで苦しむのはやめておこう。幾千回となく行われた別れの灰の中で苦しみがいまだにくすぶっているのだから。彼は自分の思い出とあらゆる時間の思い出を家と庭の中の小さな記念碑にして留めようとしたが，その巧みなやり方については敢えて言わないでおこう。彼は間違いなくドローレスのものだった。しかし，彼女とあれほど楽しく散歩した地面の方が活気を得て，彼の親友になっていた。そこでし

か暮らしたくなかった。いつかはここに自分の遺灰も迎えてもらいたかった。奇妙な，何とも奇妙なことであった。彼の中で，撥剌とした青春の盛りにある若者の中で，死の想念がかくもしばしば愛の想いに混じり込むとは。だが，この想念は我々が得られる至上の幸福の間近にあるのだ。クレーリアは何くれとなく面倒を見てくれたし，ドローレスは以前より愛情がこもっていた。彼はしばしば，到底別れられないと思っていたが，いざ別れの時になると，はたして雨のように涙を流した。彼には目の前にある家がほとんど見えなかった。今はそれも過ぎてしまった。もう一度振り返って，全部をしっかりと目に焼き付けておけ。さあ出発だ。彼の憧れについて，さんざめく若者の一行の中で彼を取り囲んでいた味気なさについて，何を言えばいいだろう。誰もが大学のことを知りたがったが，彼はすっかり伯爵令嬢達にかまけてそのことを忘れていた。彼はどこで何を見ても彼女達を思い出した。どの壁を見ても邸とどこか似ているところがあった。しかし，一人の小さな女の子を見た時には大声で泣かずにいられなかった。その子を見て何を思い浮かべたのか最初の瞬間は自分でも全く見当がつかなかったが，その子は令嬢達を小さくしたようで，似たところがあるように思えたのだ。その子には，その年頃の子どもらしい願いを聞いて，たくさん贈り物をしてやった。いたるところで，彼は時計が鳴ると，娘二人の小所帯の単調な暮らしで今何が起こっているかを思い浮かべた。いたるところで，掛けてある家庭暦がまた一日無くなったと彼に計算をしてみせた。いたるところで，彼は彼女達の知らない人間に会い，彼女達が見たこともない地方を見た。　―　いたるところで，彼は気を紛らわせようとして誰とでも話をした。あるときは相手が領主の大きな庭で働く庭師の徒弟のこともあった。徒弟は，悪態をつきながら傍らを通り過ぎて行く親方を嘲笑して言った。「あの男は，家に帰らねえように，この熱い日射しの中で仕事をしているんですぜ。帰った日にゃ，御内儀さんが血相を変えて怒るでしょうからね。」　―　「一体どうして，御内儀さんはそんなに腹を立てるのかね。」と伯爵が聞いた。　―　「よく

あることでさ。」と徒弟は言った。「領主様が今御内儀さんのところにいらっしゃるんですよ。ねえ，旦那もおわかりでしょうが，事が事ですからねえ，屋敷に出入りしているこちとら職人風情はそのことをあまり喋っちゃいけねえんですよ。」 ― 伯爵は親方をだらしがない奴だと罵った。「いつもはしっかりした男なんですよ。」と徒弟は言った。「ところが，御内儀さんはできの悪い女なのに，親方の方がぞっこんなんだ。御内儀さんと一緒にいて惨めな思いをしたくないもんで，親方はもう二度も家を出たんですよ。どこに行っても食うには困らないってわけでさあ。だけど，出て行っちゃ帰ってきて御内儀さんに詫びを入れるんだ。どうしても御内儀さんと別れられねえんですよ。まるで御内儀さんが親方に何か惚れ薬でもかがせたみたいでさあね。」 ― この話で伯爵は奇妙に背筋が寒くなり，死が彼の未来の墓の上を駆けて行くような思いがした。次の宿駅で彼は若い仲間と別れて一人残り，途々考えてきたあらゆる優しい言葉，あらゆる気遣いの言葉を彼のドローレスに宛てて書き送ったが，この話だけは伏せておいた。その代わり，彼の署名が入った真剣な手紙を領主宛に書き，その中で領主の不当な行為をどぎつく書き立てて，次の言葉でしめくくった。「これを申し上げたので私の気持ちは軽くなりました。」 ― 一時間後，両方の手紙を郵便に出してから次第に冷静になって考えてみると，領主宛の手紙はたまらなく恥ずかしく思われた。彼は目を閉じ，この手紙のせいで起こるかも知れない驚きと嘲笑のことを想うと，そのたびに赤面し，何となく苦笑いをしてしまうのだった。長いこと，彼は領主の名前を思い浮かべるだけで赤面してしまった。とりわけ，他人が見たらこの赤面を何と奇妙に思うかと考えるとなおさらだった。実に常識に外れた，おそらくは全く何にもならないことをしてしまったこの恥ずかしさで，彼は旅を続けながらも気はそぞろだった。恥ずかしさから逃れようと足取りは速まったが，その一方で一足ごとに愛が彼を引き留めた。晩も遅くなって，彼は疲れ果てて大学町の寒々とした自分の部屋に戻った。家政婦が留守だったので，新入生から灯をもらうと，部屋の中は全て出発した時

のままだった。コーヒーの道具さえ，飲みかけのところを同行の仲間に呼び出された時のままになっていた。しかし今，外はひどく寒かったが，彼の心の中は実に暖かかった。彼はせかせかと部屋の中を行きつ戻りつし，何でも手に取ってはまた置いた。外出して旧友を訪ね，講義要目を借りて来ようとしたかと思うと，今度は，これから手紙を書こうかとも思った。だが，全ては何にもならなかった。ここから離れたところにある料理屋から，心をそそる単調なダンス音楽が彼の耳に響いて来たからである。彼は，ほどなくその中に歌詞が聞き取れたような気がして，思わず一緒になって「彼女は僕のもの。つかまえて，放しはしない。」と歌わずにはいられなかった。やっと家政婦が戻って来た。彼の到着を喜んで長々と言葉を述べ立て，届いた手紙類のことを話すと，受け取ったばかりの一通を懐から取り出した。伯爵が急いで手に取ると，それはドローレスの初めての手紙で，クレーリアからの手紙も入っていた。彼はそれをすぐには読めなかった。まずはクレーリアの方から読み，次に心をときめかせながらドローレスの方を，最もいとしい手紙を読んだ。彼は明け方まで眠つけなかった。遣り取りされたこれらの手紙は全て，後にお話しするが，偶然にも焼失してしまった。手紙は彼にとってまるで国家の一大事だった。それで，灯が消えようものなら，大事な手紙の内容を間違いなく知るにはどこがよかろうかと，彼はそればかり考えた。山ほど接吻を浴びせられたこのドローレスの手紙には，町で起こったたくさんの些細な出来事が実に生き生きと書かれていた。しかし，彼女自身は常に神像のごとく冷厳に，歓呼の声を上げる民衆を睥睨（へいげい）したいという驕り高ぶった楽しみを持っていた。クレーリアの手紙にはいささか気遣わしげなことが書いてあった。そこには，彼女自身の心情に関して責めさいなむような観察が書き連ねられていたのだった。彼女の厳格さが過ちを誇大に見ていたのだ。まだ愛する人がいなかったので，彼女の友情は自分でも知らぬうちにあらゆる形で燃えるような情熱を表現していたのである。　―　伯爵はしばしば，彼にとって最も大事なこと，つまり二人がどこに招かれたとか，

そこで何を話したとかいった，日常の細々とした状況が書かれていないと感じた。いつ何時でも彼女達をありありと思い出すのにさしあたり必要なことしか書かれていなかった。それで彼はいつも，彼女達が町の説教師のところに行くと言っていた彼の出発後の数日間に留まっているのだった。彼は，二人が自分のことで知りたがっていることにも同様にほとんど出会わないことに，自分自身気づいていなかった。彼には，自分の身に起こったことなど，かくもすばらしい女性達には全く語るに値しないことのように思われた。また，星々をちりばめたような彼の空想（ファンタジー）は半ば詩の形で，たいていは走り書きでびっしりと書かれていたので，姉妹のどちらもしばしば一つ一つの文字すら判読できないほどだった。しかし，彼のどの手紙も二人にはやはり嬉しかった。彼の方も二人の手紙を生きる糧とし，その中でかくも美しい至福の時間を過ごしていた。手紙は彼にとってあらゆる仕事の最高の報酬であり，多くの古い宗教書にはっきりと言われているごとく，手紙を何度も読み返すのは称賛に値することのように思えた。手紙の配達人は彼の最高の友であり，彼は配達人が来るのを予感できた。冬は彼にはゆっくりとあっという間に過ぎた。待つときにはゆっくり，もうまた一月（ひとつき）乗り越えたと考えるとあっという間にという具合に。美しい時にドローレスから贈られ，彼のポーランド帽にとまらせて連れて来た鶯は，春が小鳥達を大地の彼方から連れて来るずっと前に，みごとな旋律（メロディー）でこんな歌を歌った。

愛し，また愛されようと，
緑なす大地を旅行く。
ああ僕をつなぎとめる眼差しは，
何処で僕を見出すのか，
何（いず）れの敬虔な家庭に
留まることになるのか，愛されるために。※15

（第一部・完）

注

※1　ラツィヴィル侯爵

アントン・ハインリヒ・ラツィヴィル（1776－1833）。ポーランド・リトアニアの最古の名門貴族の出身でプロイセン王家と姻戚関係を結んだ。アルニムはこの献辞によって暗に反ナポレオンの態度を明らかにしている。ベルリンの侯爵家にはブレンターノ，クライスト，アーダム・ミュラーなどの詩人達が集った。アルニムは彼と1806／7年にケーニヒスベルクで知り合ったと思われる。侯爵は作曲家としても名をなし，ゲーテの『ファウスト』および本作品の二つの詩にも曲を付けている。

※2　ほの暗いいにしえの時代

中世のこと。

※3　パラディオン

アンドレア・ディ・ピエトロ（1508－1580）。イタリア・ルネッサンスの建築家。ヴィツェンツァとヴェネツィアには彼の手で邸宅や教会が建てられ，古代ローマの伝統を受け継いだその建築理論は後世に大きな影響を与えた。ゲーテは『イタリア紀行』で彼の天才を称賛している。

※4　庭園

18世紀には厳密な様式美のフランス風庭園と自然を模したイギリス風庭園とが競合していた。

※5　ドローレス

この名前は「悲嘆」，「苦悩」の意味を持つラテン語の dolor に由来する。

※6　あらゆる身分の均一化

フランス革命を暗示。

※7　ユーグ・シャプラーのことを書いた古い本。

フランス王ユーグ・カペー（938頃－996，在位987－996）に関する英雄歌謡は14世紀にフランスで書かれ，16世紀にはエリーザベト・フォン・ナッサウ＝ザールブリュッケンおよびコンラート・ハインデルファーによってドイツ語に翻訳された。この民衆本を基にした挿話は，アルニムによって自由に翻案されたものである。

※8　アルメ・リッター

牛乳と卵白に浸してバターで焼いた薄い白パン。

※9　聖ディオニュース様

パリ市の守護聖人。

※10　パスヴァン・オーグル

パンジャブのムガールの意か。

※11　ある若い伯爵
外見の描写はアルニムの親友クレーメンス・ブレンターノを彷彿とさせるが，思想においてはむしろアルニムの分身と考えられる。

※12　不倶戴天の敵
ナポレオンの率いるフランスのこと。

※13　帽子を穴だらけにしてしまう
学生歌「国父（Landesvater)」を歌いながら学生達によって帽子に穴が開けられ，司会者によってまた分配される酒宴の儀式。

※14　バルボア
ヴァスコ・ヌニェス・デ・バルボア（1475頃－1519)。スペインの南米征服者で，太平洋の発見者。

※15　愛し，また愛されようと
この詩は『春の歌』という題でラツィヴィル侯爵によって曲が付けられた。

（付記）

本書は，ドイツ・ロマン派の作家ルートヴィヒ・アーヒム・フォン・アルニム（Ludwig Achim von Arnim, 1781－1831）の長編小説『ドローレス伯爵夫人の貧と富と罪と贖い』（„Armut, Reichtum, Schuld und Buße der Gräfin Dolores“, 1810年刊）第一部の翻訳である。

翻訳にあたっては次の全集版を底本にした。

Achim von Arnim : Sämtliche Romane und Erzählungen, Erster Band. München (Carl Hanser Verlag) 1974.

なお，以下の版も参照した。

Achim von Arnim, Werke in sechs Bänden, Band I. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1989.

翻訳者両名は，十数年来ドイツ・ロマン主義文学について共同研究を行っており，本編はその成果の一端である。訳出に際しては，分担を行わず，山下と林が全編にわたって完全な共訳を行った。

訳者：山下　剛（本学専任講師）・林　雄作（山形大学助教授）